関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

# 東北タイ農村の40年間における小学生の意識変化 ：ドンデーン村を事例として

| | |
|---|---|
| 著者 | 野間 晴雄, 岡田 良平 |
| 雑誌名 | 史泉 |
| 巻 | 105 |
| ページ | 1-16 |
| 発行年 | 2007-01-31 |
| その他のタイトル | The Change of Primary Students' Attitude in Last 40 Years in Rural Northeast Thailand : A Comparative Analysis of 20 years-interval Questionnaire Surveys |
| URL | http://hdl.handle.net/10112/6352 |

# 東北タイ農村の40年間における小学生の意識変化

## ——ドンデーン村を事例として——

野間　晴雄・岡田　良平

### 1. はじめに

発展途上国における教育や進学についての研究は，教育学や社会学などさまざまな分野で取り上げられている[1]。これらの研究では，東南アジア各国の民族や宗教の違いなど社会的，文化的差異における教育課題や，急速な経済発展にともなう教育の地域間格差などを考察している。本研究で取り上げるタイ東北部も，これら先行研究で取り上げられた地域と同様に，社会的，経済的，文化的差異から，タイ中央部との教育水準格差は大きい地域である。

ドンデーン村は，水野浩一[2]が1964年に単独調査をおこない，1981年から口羽・福井[3]らによって継続調査された村である。村はコンケン市内中心部から比較的近距離に位置するため，コンケン市の目覚しい経済的発展にともなって，ドンデーン村の社会的経済的環境は東北タイの他地域の農村とは異なった性格を持っているといえる。従来の研究対象地域では，バンコクなどの都市部か経済的に貧しい地域の農村部[4]，北タイの少数民族，南タイのイスラム教社会といった比較的特徴のある地域社会を対象とする調査が多い。そのため，急速に商品経済化が進展し，社会・経済的にも，また文化面でも中心都市の影響を顕著に受ける都市近郊農村社会という地域での研究は少ない。

本報告では，タイ東北部に位置するコンケン県ムアン郡ドンハン区にあるドンデーン（Don Daeng）村を事例とし，過去2回のドンデーン・ドンノーイ村小学校の小学生を対象としたアンケート調査の比較結果から，現在の小中学生の生活，進学，就職についての意識変化を比較し，東北タイ農村社会の40年間の変容を考察するものである。

ドンデーン村はコンケン市内中心部から車で約30分程度のところにある。ドンデーン村と派生村のドンチャロン村を合わせた人口は2002年の段階で1086人(男性555人･女性531人)，265世帯である[5]。交通の便も比較的良く，国道208号線に出ればコンケン市内中心部行きのソンティオと呼ばれるミニバスや定期バスが頻繁に行き来しているばかりでなく，現在は日中ほぼ1時間間隔で村内を巡回してコンケンの中心部へ行くミニバスがある。これらは村民の通勤や通学，買い物に利用されている。そのため，ドンデーン村のような農村社会でも学歴の持つ意味は必然的に高くなり，村の若い世代は高学歴化の傾向にある。

この40年，ドンデーン村の性格は水野時代の自給自足農村（1964年世帯数132，人口810，農外所得21%）から，83年には半分を農外収入に頼る兼業農村（世帯数176，人口901，農外所得68%）に，さらに現在では都市近郊農村（世帯数265，人口1086，農外所得84%）と変化し

た。世帯数で2倍の増加だが，人口は34%の増加にすぎない。平均世帯人員の顕著な減少（6.14→5.12→4.10）は多様な家族類型をもたらし，核家族世帯は81年の62%から2002年には42%まで減少した。

今回の調査期間は，①2004年9月3日～2004年9月13日，②2005年1月31日～2005年3月17日，③同年8月9日～9月23日の3期に分けて実施された。このうち本稿は，①の期間に野間・岡田が実施したドンデーン村小中学校へのアンケート調査が本分析の中心となるものである。岡田は②・③の期間に，学校やコンケン市にある教育局などの行政からの資料提供をうけ，調査対象者への直接の聞き取り調査を実施した。調査に際して両名は，ドンデーン村に住み込み，できる限り村人や学校関係者と直接接することで，信頼関係を構築することを心がけた。

## 2. タイの教育制度の変遷とドンデーン村の変貌

### (1) タイの教育制度の変遷とドンデーン・ドンノーイ村小中学校

タイにおける初等教育は，かつては寺院で僧侶から仏陀の教えと読み書きを教わるものであり，それも男子に限られていた。1921年ラーマ6世ワチラウット王のときに初等教育令が発布され，男女共学4か年の無償の義務教育（プラトム）が始まる。当初は数か村に1校の割合で，寺院内に設けられた。ドンデーン村がチー川の川下，ローイエット県から来住したのが1874年であり，これを公式の開村年とすることが多い[(6)]。つまり農業適地を求めた西へ向かう農村－農村人口移動の大きな流れの一齣に位置づけられる。

古老からの聞き取りでは，ドンデーン・ドンノーイ村小学校の歴史は，1918年のノンコイ村のポーシー寺（Wat Pho Si）での読み書などの手習いに始まる。1924年に村の寺であるポーティーバンラン寺（Wat Phothibanlang）への移転を経て，ドンハン村，ノンカイヌン村など周辺の村に一時的に小学校が移転したが，いずれも寺での識字教育や道徳教育が中心であった。寺から分離してドンデーン村の現在地に小学校が建設されたのは1940年である。したがって，公式の『学校沿革史』ではこの年が学校創設年となる。当時の正式名称はドンハン区第1小学校（Prachaabaan Tambol Don Han 1）であった（別称はDon Han vitthayaasaan）。創設時には政府より900バーツが支給され，教員，村長，村人から寄付金を集め4教室ある小学校が建設された。

当時の通学区域は隣接するドンハン村とサワン村を含んでいた。この両村はマハサラカーン県へむかう国道208号線に近い高燥な台地上の集落で，モータリゼーションの発達した現在でこそドンデーン村よりもバス道路に近いために好立地にあると思われやすいが，稲作の適地としてはチー川に沿った沖積低地が卓越するドンデーン村が優る。ドンハン区の西部の4村（ドンデーン，ドンハン，ドンノイ，サワン）のうちではドンデーン村が中心的集落であり，地域の核となる小学校が建設されたことは重要な点である。いずれも国道208号からの分岐道路沿いにある。かつては，その最奥の集落がドンデーン村・ドンノーイ村であった。現在ではドンデーン村から車では北にむかって，ターブラを経由せずにコンケン市街地へ行ける（図1）[(7)]。1952年には校名をPrachaabaan Don Daengと改称している。

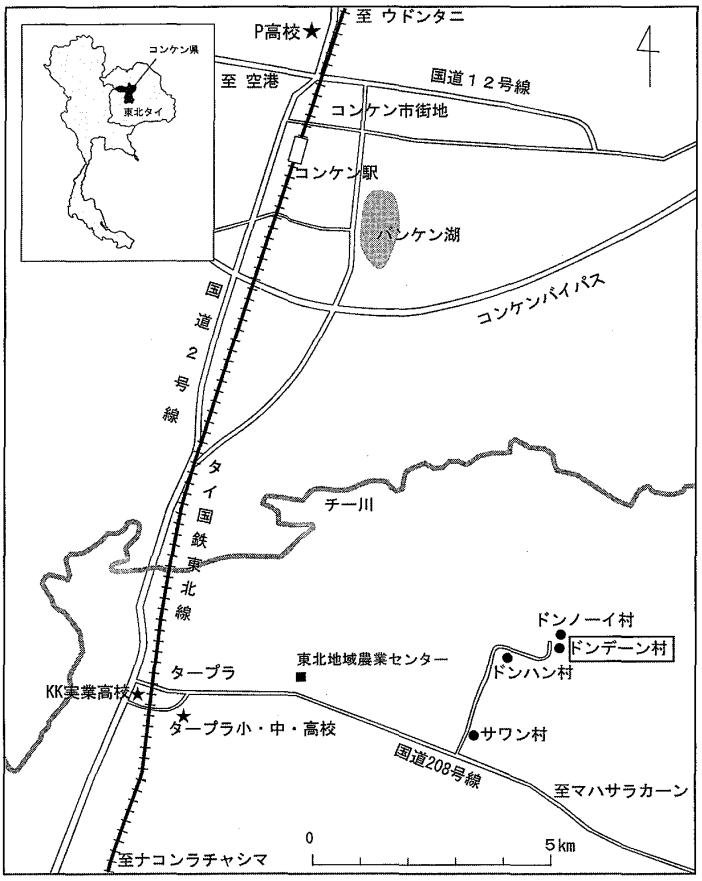


図１　ドンデーン村周辺とコンケン市

1960年の勅令によって，タイの初等教育は尋常科4年と高等科3年（旧中学下級科3年を改編）の7年制になる。しかし，水野博士の調査当時は，村の子供のほとんどは尋常科を終えると家の農作業を手伝い，高等科やそれ以上の上級学校への進学は極めて稀であった。

1972年には待望の新校舎が旧校舎の東隣に建設される。これが現在ある第1校舎で，総費用は10万バーツであった。また，1974年にはサワン村に，78年にはドンハン村に小学校が建設されたため，この両村の小学生は基本的には，ドンデーン村小学校の通学範囲からはずれることとなった。

1978年には再び教育制度が改革され，日本と同じ6–3–3制が実施される。ドンデーン村小学校はドンデーン村とその分村であるドンノーイ村の児童の初等教育6年を担うこととなった。ドンデーン村の小学校も，それまでの4年制から6年制に切替わり，義務教育化された。

1982年，政府から60,000バーツが支給され校舎が改築（現在の第2校舎）され，さらに，同年には教員住宅（1軒）も建設された。さらに郡役所から80,000バーツが支給され，雨水保存タンクが8基設置された。

これ以降，学校内のインフラ整備が急速に進展する。1987年にはドンデーン村，ドンノーイ村住民と教職員が寄付をして，放送設備（23,635バーツ）・仏像の台座（7,816バーツ）・用地買収（3,000バーツ），サッカー場建設（78,000バーツ），花壇・庭園（15,000バーツ），土地（15,000バーツ）などを購入した。1990年には以前の講堂を撤去し，廃材と寄付金で図書室と共同購買店を設置している。1995年には校内コンクリート舗装を50,000バーツで行った。

ドンデーン村・ドンノーイ村小学校は，地域有力校であることを誇示するごとく，住民も積極的に学校に寄付をするとともに，国や外国の補助金も活用していった。その結果，周辺の小規模校と比較すると明瞭な設備の格差が生じることとなった。

教育制度から見ると1991年8月に大きな改革が閣議決定される。義務教育の6年から9年の延長である。より正確には，小学校修了後の3年間の無償基礎教育が提供されたと表現すべきである。この改革を受けて，ドンデーン村では1996年に中学校が併設された。これは中等教育の

普及の遅れている農村部でできるかぎり迅速に前期中等教育3年，日本でいえば中学校レベルの教育を提供するために，既存の小学校に中学校を付置するものである。したがって，従来からの中等教育学校とは明らかにその出自が異なる。

教育省における管轄も「機会拡充中学」が初等教育庁（ONPEC）であるのに対して，旧来の中等教育学校は普通中等教育局（DGE）が所管する。義務教育の延長は実際には「小学校の施設・設備や教員の『遊休化』により，小学校の継続教育としての3年課程の併置措置による『高等小学校』設置であり，従来の6年一貫中等教育学校との並立による『デュアル・システム』の成立」を孕んだものであった[8]。

ここに，現在，ドンデーン・ドンノーイ村の父兄が懸念する地元小中学校への質の低さと，よりよい初等中等教育を求めて，コンケンやその中間にある町であるタープラの普通中等学校や私立の小中学校への進学熱の契機がある。

現在では適齢期の児童の小学校就学率はドンデーン村でもほぼ100%に近い段階まで達しているが，これは1983年の野間の調査時でもほぼ該当していた。しかし，現在では，9年の義務教育化と，97年憲法にうたわれた12年以上の基礎教育をうける権利に由来する実質的な後期中等学校レベル（高校レベル）の準義務教育化が，子どもや両親の意向や教育観にも大きな影響を及ぼしていると推測される[9]。

タイ国内ではもっとも貧しいとされてきた東北タイでも，ここ20年の経済成長は著しく，安価な労働力を求めて現在でも多くの企業が進出している。そのため経済的な貧富の格差が加速度的に増している。特に都市部と農村部での経済格差は激しく，タイ国内における従来までの華僑系中心による一部階層や経済面での優越性だけでなく，広く一般タイ人の間にも貧富の格差が顕著になっている。ドンデーン村でもその影響が進学先の選択に表れてきている。

ドンハン区内には現在，村が8つある小学校は，ドンデーン・ドンノーイ村小学校，ドンハン（Don Han）村小学校，サワン（Sawan）村小学校，ノンヤプレーク・ターレー（Nong Yaphreak Tha Rae）村小学校，ノントゥン（Non Tun）村小学校，ラオノクチュン（Lao Nok Chum）村小学校，ノンカオ（Non Khwao）村小学校の計7校である。それぞれに併設され幼稚園が7つある。

そのうち，ドンデーン・ドンノーイ村小学校と，ノンヤプレーク・ターレー村小学校の2校には中学校が併設されている。この2校が既存の6年一貫の中等学校ではなく，「機会拡充中学校」と呼ばれるものに相当する。現在，タイでは小学校の統廃合がおこなわれており，第1地方教育区（Education Service Area）でも2003年までに34の小学校が統廃合された。この中にはドンハン区のループヤーカー村小学校も含まれている。次ページにドンハン区内の保育園，幼稚園，小学校，中学校の生徒数の一覧を示す（表1）。

2005年現在，ドンハン区内で最も児童生徒数の多い学校はノンヤプレーク・ターレー村小中学校の383人である。現在，ノンヤプレーク・ターレー村小中学校の通学区域は，ノンヤプレーク村とターレー村に加え，2003年に統廃合されたループヤーカー村小学校の地域も含んでいる。また，ドンハン区で唯一保育園を持っている。最も規模が小さい学校はサワン村小学校で，

**表1**　ドンハン区小中学校生徒数一覧（2005年8月）

| 学校名 | ドンデーン・ドンノーイ村小中学校 | | | ノンヤプレーク・ターレー村小中学校 | | | ドンハン村小学校 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学年 | 男子 | 女子 | 計 | 男子 | 女子 | 計 | 男子 | 女子 | 計 |
| 保育園 | — | — | — | 14 | 11 | 25 | — | — | — |
| 幼稚園1年 | 13 | 8 | 21 | 9 | 5 | 14 | 6 | 8 | 14 |
| 幼稚園2年 | 12 | 12 | 24 | 17 | 14 | 31 | 11 | 10 | 21 |
| 小学1年 | 5 | 12 | 18 | 14 | 16 | 30 | 8 | 10 | 18 |
| 小学2年 | 9 | 8 | 17 | 23 | 17 | 40 | 10 | 2 | 12 |
| 小学3年 | 18 | 16 | 34 | 21 | 18 | 39 | 9 | 11 | 20 |
| 小学4年 | 12 | 14 | 26 | 16 | 18 | 34 | 8 | 12 | 20 |
| 小学5年 | 16 | 16 | 32 | 22 | 13 | 35 | 9 | 8 | 17 |
| 小学6年 | 18 | 12 | 30 | 16 | 17 | 33 | 9 | 12 | 21 |
| 中学1年 | 8 | 8 | 16 | 25 | 9 | 34 | — | — | — |
| 中学2年 | 13 | 12 | 25 | 18 | 15 | 33 | — | — | — |
| 中学3年 | 20 | 14 | 34 | 22 | 13 | 35 | — | — | — |
| 計 | 144 | 132 | 276 | 217 | 166 | 383 | 70 | 73 | 143 |
| 教員数 | 9 | 8 | 17 | 7 | 15 | 22 | 8 | 3 | 11 |

| 学校名 | ラオノクチュン村小学校 | | | ノンカオ村小学校 | | | ノントゥン村小学校 | | | サワン村小学校 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学年 | 男子 | 女子 | 計 | 男子 | 女子 | 計 | 男子 | 女子 | 計 | 男子 | 女子 | 計 |
| 保育園 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 幼稚園1年 | 10 | 8 | 18 | 4 | 10 | 14 | 4 | 6 | 10 | 9 | 5 | 14 |
| 幼稚園2年 | 6 | 7 | 13 | 2 | 6 | 8 | 5 | 4 | 9 | 5 | 2 | 7 |
| 小学1年 | 7 | 7 | 14 | 7 | 5 | 12 | 6 | 8 | 14 | 2 | 7 | 9 |
| 小学2年 | 16 | 17 | 33 | 6 | 7 | 13 | 6 | 15 | 21 | 4 | 6 | 10 |
| 小学3年 | 5 | 9 | 14 | 11 | 4 | 15 | 10 | 8 | 18 | 2 | 7 | 9 |
| 小学4年 | 18 | 10 | 28 | 7 | 2 | 9 | 13 | 4 | 17 | 6 | 4 | 10 |
| 小学5年 | 6 | 15 | 21 | 8 | 5 | 13 | 8 | 5 | 13 | 4 | 9 | 13 |
| 小学6年 | 11 | 9 | 20 | 7 | 12 | 19 | 6 | 12 | 18 | 4 | 4 | 8 |
| 中学1年 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 中学2年 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 中学3年 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 計 | 79 | 82 | 161 | 52 | 51 | 103 | 58 | 62 | 120 | 36 | 44 | 80 |
| 教員数 | 3 | 5 | 8 | 6 | 3 | 9 | 4 | 6 | 10 | 2 | 4 | 6 |

総児童数も80人にすぎず，1学年でも約3分の1の児童しかいない。

学校教育における学習の機会均等のため，設立された農村部の学校でも学校規模やその設備には大きな格差が生じつつある。行財政の悪化から学校の統廃合が進められており，ドンデーン村周辺の学校も同様の状況にあるといえる。

### (2) 中心都市コンケンの発展とドンデーン村住民

コンケン市は東北タイではナコンラチャシマ（コラート），ウドンタニに次ぐ都市で，県都が位置する中心郡（Muang）の人口は364,565人で，1995年の市街地人口（City Municipality）は122,039人である。コンケンはベトナム戦争以来，アメリカ軍のメコン川流域の開発と軍事ルートの重要拠点，発展の遅れた東北タイ開発の拠点として国策で整備されていった。周辺の都市化

・住宅地化が著しく，位置的にもラオスの首都ビエンチャンに連なる国道2号線（アジアハイウェー）沿いにあるため，中心機能の集積は実際の都市人口規模以上に大きく，日本の20万都市級の風格がある。広大なキャンパスをもつコンケン大学はその象徴であり，東北タイ唯一の五つ星ホテルも市内に存在する。2003年にはAPECの開催地の一つとなるなど社会・経済的にも東北タイの中心の一翼を担いつつある。その一方で，旧来のイサーン文化が，なお色濃く残る都市でもある。

市内の北部の台地委上には公官庁の行政施設が集中している。その南に位置する長距離バスターミナルや市場は毎日多くの人で賑わっている。また，若者向けのファッションや外食チェーン店，電子機器を取り扱う大型商業施設も市内にあり多くの若者が集まっている。

国道2号線に沿った南郊には，全国展開する大規模ショッピングセンターがこの10年間に3店出店しており，大規模な駐車場を備え，休日には車やソンティオなどのミニバスで買い物に来た人でごった返している。こうした郊外型の大型ショッピングセンターはコンケン市内に住む人だけでなく，ドンデーン村などの農村部も商圏に含んでいる。ここの従業員として働く村の女性もいる。土日などの休日には村の人々も家族連れでこうした大型ショッピングセンターでまとめ買いし，子どもをショッピングセンター内の遊具で遊ばせる光景がみられる。

## 3. 過去2回のドンデーン村小学生に対する調査

### (1) 1964年頃のドンデーン村の子どもたち

水野は1964年のドンデーン村調査の際に村の子どもたちに簡単なアンケート調査をおこなった。この調査において，水野はドンデーン村小学校の小学生59人を対象に，子どもの1日の生活行動や生活意識の差，生活習慣や道徳的規範などを記録している[10]。

例えば昼食については，「(前略) 11時に朝の時間が終わると，ほとんどが帰宅して昼食をする。家の人の食事はたいてい午後2時頃であるから，自分で適当に出して食べる」と記し，ごく一部ではあるが，当時の子どもの生活の一端が垣間見られる。また，子どもの進学意識について以下のように記している。

> (小学校を) 卒業するときの子供たちの態度は積極的である。すなわち，59人中17人は「できれば進学したい」と答え，39人は「卒業すれば，さらに両親を助けることが出来るから嬉しい」と答え，単に「勉強しなくてもよいから嬉しい」と答えたものは3名にすぎない。しかし，実際に進学しうるものはほとんどなく，多い年で6～7名，しない年の方が多い。親は子供たちが農事の手助けをすることを望まざるをえないからである。卒業後は農事，家事の見習い，そして放牧の生活が長い間つづく。

1964年当時において，56人の子どもが進学に対して前向きな態度を示している一方，実際には上級学校（3年制後期初等教育）への進学はほとんどなく，経済的・労働価値的な理由から子どもの進学が困難であったことを示している。

### (2) ドンデーン村小学校における子どもの意識調査と教員

水野の調査から約20年後の1983年に，野間晴雄は水野と同様に，ドンデーン村小学校の小学生を対象にアンケート調査を行い，簡単な分析を試みた[11]。このアンケート調査は，水野の調査項目を基本的に踏襲しながら，一部改変したものであった。調査対象者は小学3年生22人，小学6年生22人の計44人であった。

1983年のドンデーン村小学校の総生徒数は186人で，教員は校長を含めて11人であった。校長を除く10人の教員の平均年齢は30.4歳と若く，そのうち女性教員が4人であった。村には3人の教員が居住しており，他の教員はモーターバイクやミニバスを利用して通勤していた。3名の教員は小学校に併設されている教員宿舎に居住していた。

2004年の調査では，村の小中学校には校長を含め，教員が17人（うち女性8人），用務員1人（ドンデーン村在住）である。1983年時に比べて6名の増加であるが，それにもまして注目すべきは教員の平均年齢である。1983年に比較して17歳増加して，2004年では47.3歳(最高56歳・最低43歳）となっている。

このような教員の高齢化がなぜ起こるのであろうか。校長にたずねたところ，「新しい知識を持った教員や優れた能力の教員は都市部の学校に配属され，それらの知識に追いつけない教員は農村部の学校に配属される。教員は国家公務員であるが，こうした意図的な配属がなされている」という説明を受けた。

こうした現状を示す結果として，教員のドンデーン・ドンノーイ村小中学校での勤務年数を聞いたところ，平均勤務年数は11年9ヶ月であり（最長25年・最短3ヶ月），1981年からのドンデーン村調査開始当時から在籍している教員も3人いた。完全な教員人事の停滞からみられる。現在のドンデーン村では，地域の学校としての関わりは村の行事が学校でなお実施されるものが多い。住民は学校の一定の協力維持の姿勢を保持しながらも，本音では，経済力があればコンケン市内の国立の有名校や私立の小中学校へかなりの出費を覚悟で出す家族もある。

教員の通勤の形態も変化し，1983年では村内に住む教員3人以外は，モーターバイクやミニバスで通勤していた。現在では，3人の村内居住者以外はモーターバイクか自家用車での通勤である。

子どもの小学校までの通学時間は，遠くても15分程度である。83年当時は昼食の時間には自宅に食べに戻っていた。通常は両親が農作業や他の仕事で外に出ているため，子どもだけでありあわせの食事をとることが多かった。こうした光景や子どもたちの闊達な姿は水野の調査当時と大きな変わりなく見られるもの

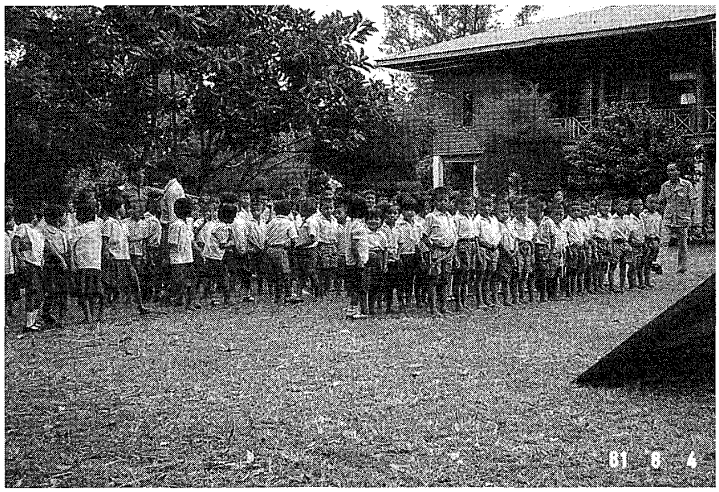

**写真1**　ドンデーン村小学校での朝礼（1981年）

だった。現在では学校内での給食が一部で行われるほか，村内の軽食堂で昼食をとる児童も多い。

1983年当時，小学校の第1学期は5月1日～8月10日まで，第2学期は8月26日～11月30日まで，第3学期は12月16日～3月26日までの3学期制をとっていた。第1・第2学期の間には田植え休み，第2・第3学期の間は稲刈休みがあり，夏休みに相当するのが東北タイの暑季にあたる第3学期末にくる。水野調査時の1964年からの変化では，小学校の総生徒数が230人から186人に減少していることで，その要因としては通学区域が4村からドンデーン村とドンノーイ村の2村になっていることが挙げられる。

## 4. 現在のドンデーン村小中学生の意識調査とその変質

### a. 調査にあたって

2004年9月にドンデーン・ドンノーイ村小中学校においてアンケート調査を実施した。アンケート内容は1964年の水野調査時，1983年の野間調査時における質問項目を踏襲し，一部改変したものである。調査対象は，野間が当時，小学3年生と6年生を対象におこなったため，小学3年生26人，小学6年生27人の計53名に対して実施した。アンケートの記入に関しては，授業中（1時限分）に，教科担任もしくは担任の教師，通訳のタイ人学生アシスタント，調査者の3人が同席して実施した。また，併設の中学校にも生徒がいるため，中学3年生27人にも同様にアンケート調査を実施した。

同一農村において，約20年周期で同学年の子どもに同一の質問を実施することで，同一村落の小学生の意識が40年間でどのように変化したのかを考察することができる。以下では，水野，野間の調査結果との比較考察を述べる。

### b. 最も尊敬する人

水野，野間調査時と同様に「最も尊敬する人は誰ですか。」とたずねたところ，「親」と答えたのは49人で最も多く，次いで「国王」であった。「教師」と回答したものはおらず，1983年の回答と大きな差はみられない。83年当時は44名中，両親が32名（77%）と圧倒的な割合を示す。「教師」はわずか1名のみの回答であった。第2位は国王の10名で，教師・僧侶はわずかに1名ずつにすぎない。1965年に水野が59名を対象に行なった調査では，教師（最も身近な自村の小学校の教師を指す）が，59人中35人と，6割近い回答を占め第1位であった。両親の4割よりも多いのとは対照的である。

**表2** 最も尊敬する人は誰か

| | 小学生 | | | 中学3年 |
|---|---|---|---|---|
| | 1964年 | 1983年 | 2004年 | 2004年 |
| 教　師 | 35 | 1 | 0 | 0 |
| 親 | 24 | 32 | 49 | 25 |
| 国　王 | － | 10 | 4 | 2 |
| 僧　侶 | － | 1 | 0 | 0 |
| その他 | － | 0 | 0 | 0 |
| 計 | 59 | 44 | 53 | 27 |

※単位は人数

### c. 進学希望の変化

表3は「あなたは進学したいですか」という質問の回答結果である。2004年では小学生，中学生ともに全員進学希望を持っている。1964年では進学希望者が17名，比率にして29%であったが，1983年には70%，2004年には100%に達している。

このうち，進学希望を持っている子どもに対して，1983年と2004年の内訳を以下に示す（表4）。その内訳をみると中学（3年制）9名，高校（3年制）7名で半数を占め，他は工業や商業系の実業学校と大学である。2004年の結果では，小学生の大学への進学希望が32人（60%）と非常に高くなっている。しかし，中学3年生になると現実的な選択を持つからと推測されるが，高校や専門学校への進学を希望する傾向が顕著になる。

**表3**　あなたは進学したいですか

| | 1964年 | 1983年 | 2004年 | 2004年（中3） |
|---|---|---|---|---|
| いいえ | 42(71%) | 13(30%) | 0(0%) | 0(0%) |
| はい | 17(29%) | 31(70%) | 53(100%) | 27(100%) |

**表4**　もし進学するならどこまで進学したいですか

| | 1964年 | 1983年 | 2004年 | 2004年（中3） |
|---|---|---|---|---|
| 中学校 | − | 9 | 13 | 0 |
| 高校 | − | 7 | 2 | 10 |
| 実業学校 | − | 4 | 1 | 4 |
| 師範・看護系学校 | − | 3 | 5 | 10 |
| 大学 | − | 8 | 32 | 2 |
| 不明 | − | − | − | 1 |
| 計 | 17 | 31 | 53 | 27 |

進学に関する問いに対しては，水野調査時は59人中42人（71%）が進学を希望しなかったが，1983年では44人中31人（70%）が，なんらかの形での進学を希望している。しかし，当時でさえ，ドンデーン村から4年生制大学に通うものはおらず，師範学校が最高学歴であった。

### d. 将来就きたい職業

表5では，「将来どんな職業に就きたいですか」という問いを1983年と2004年で比較した。その結果，1983年において，最も就きたい職業であった「農業（36%）」は2004年にはまったく無くなり，看護士やスポーツ選手といった職業に人気があることがわかる。その一方で，警察官や軍人，教師といった公務員などの収入の安定した職業への希望は現在も強く，顕著な変化はみられない。

こうした結果が，彼らの就職に直接結びつくものではないが，少なくとも現在のドンデーン村小学校の子どもにとって，「農業」は決して魅力ある職業というイメージを持つことができない職業であることを示唆している。また，それは看護士や警察官などの「比較的安定した収入のある賃金労働」という職が身近な存在になっていることも意味している。

### e. 将来の村への居住希望と都市へのあこがれ

表6では，「将来，結婚したら村に住みたいですか」という質問を，学年別，性別ごとに集計

**表5**　将来どんな職業に就きたいですか

| | 1983（小3） | 1983（小6） | 2004（小3） | 2004（小6） | 2004（中3） |
|---|---|---|---|---|---|
| 農　民 | 7 | 9 | 0 | 0 | 1 |
| 警察官 | 3 | 0 | 3 | 4 | 7 |
| 商　人 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 軍　人 | 2 | 7 | 1 | 4 | 1 |
| 教　師 | 9 | 1 | 6 | 1 | 2 |
| 医　者 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 |
| 看護師 | 0 | 2 | 4 | 13 | 5 |
| スポーツ選手 | 0 | 0 | 6 | 2 | 1 |
| 建設業 | 0 | 2 | 1 | 0 | 0 |
| 会社員 | − | − | 0 | 1 | 5 |
| プログラマー | − | − | 0 | 1 | 1 |
| 会社経営 | − | − | 3 | 0 | 2 |
| 工場労働 | − | − | − | − | 1 |
| その他 | − | − | − | − | 1 |
| 不　明 | − | − | 2 | 0 | 0 |
| 計 | 22 | 22 | 26 | 27 | 27 |

**表6**　将来結婚したら村に住みたいですか　　比率（%）

| | 学年 | | 性別 | | 学年 | | 性別 | | 学年 | 性別 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 小3 (1983) | 小6 (1983) | 男子 (1983) | 女子 (1983) | 小3 (2004) | 小6 (2004) | 男子 (2004) | 女子 (2004) | 中3 (2004) | 男子 (2004) | 女子 (2004) |
| はい | 77 | 95 | 83 | 90 | 35 | 70 | 54 | 52 | 26 | 18 | 21 |
| いいえ | 23 | 5 | 17 | 10 | 65 | 30 | 46 | 48 | 74 | 82 | 79 |

したものである。2004年では，小学3年生以外の結果は半数以上が「村に住みたい」と考えているが，子どもたちの将来の村への居住希望は全体的に減少傾向にある。

特に，中学3年生では74.1%が村外への居住を希望している。しかし，回答者のほとんどが村外へのあこがれを持つ中で，「村に住みたい」とする中学3年生男子（18.1%）と女子（31.2%）は，女子の末子相続による妻方優位の傾向を背後から支持する結果となった。

こうした都市部へのあこがれは，ドンデーン村においてテレビ（97.4%）や冷蔵庫（83.0%）といった電化製品の普及率が高いこと[12]からもわかるように，都市的生活が農村部にも広く普及していることがいえる。

表7の，「もし村以外に住むなら，どこに住みたいですか」という問いでは，1983年は「コンケン市内」と回答したのが15人と最多であったが，2004年では，「バンコク」が31人と圧倒的

**表7**　もし村以外に住むなら，どこに住みたいですか

| 場所＼調査年・学年 | 1983 | 2004（小学生） | 2004（中3） |
|---|---|---|---|
| コンケン市内 | 15 | 10 | 3 |
| バンコク | 7 | 31 | 12 |
| コースムピサイ | 3 | 0 | 2 |
| ドンハン | 1 | 0 | 5 |
| タープラ | − | 0 | 2 |
| 外国 | − | 2 | 2 |
| 不明 | | 10 | 1 |
| 計 | 26 | 53 | 27 |

に多い。さらに，回答は「バンコク」と「コンケン市内」のみで，農村や周辺の町への希望は無いことがわかる。

都市へのあこがれがコンケン市内からバンコクへ変化した要因には，前述したように，生活用品の充実や都市の情報の流入などが考えられる。「あなたの知っている外国の有名人は誰ですか」という質問（複数回答を認めた）に対しては，32名から回答があり第1位となったのが欧州のサッカー選手たちである。

これに続くのがF4という台湾の4人組男性グループで21名である。この4人は2001年に，日本の人気コミック「花より男子」を台湾でドラマ化した「流星花園」に出演して一気に人気が出たタレント兼歌手である。第3位が同じく日本のコミックから出た「ちびまるこちゃん」13名（18%）である。テレビなどのメディアを通して，さまざまな形で国際的な異文化に接していることがある。こうした間接的な「都市的文化」との接点だけでなく，直接的な「都市的文化」との接点にも原因が求められるのではないだろうか。ちなみに，第4位は調査時の世界の政治状況を反映して，イラクの首相であったサダム・フセインの8名であった。

### f. コンケン市内に行く頻度

表8，図2は，コンケン市内に誰と行くのかと，その頻度をたずねたものである。この結果では，小学生では，「親」同伴で出かけるケースが多く（小学校3年生は92%，小学校6年生は62%），その頻度も週1回から月1回という回答が最も高い。中学生になると，「友だち」と行く（77%）ことが多くなる傾向をもつ。

**表8**　ふだん誰とコンケン市内に行きますか

| | 学年 | | |
|---|---|---|---|
| | 2004（小3） | 2004（小6） | 2004（中3） |
| 一人 | 0 | 0 | 0 |
| 友だち | 1 | 7 | 21 |
| 親 | 24 | 17 | 3 |
| 兄弟 | 0 | 3 | 1 |
| その他 | 0 | 0 | 1 |
| 不明 | 1 | 0 | 1 |
| 計 | 26 | 27 | 27 |

こうした結果はドンデーン村の立地とコンケンへの交通の利便性に関係すると考えられる。コンケン市内から約23 kmと中心都市に近く，ドンデーン村からの直通のコンケン中心部へのミニバスのほか，国道208号線の定期バスや他の村から来たミニバス，あるいは一部の住民が所有する乗用車の利用が考えられる。

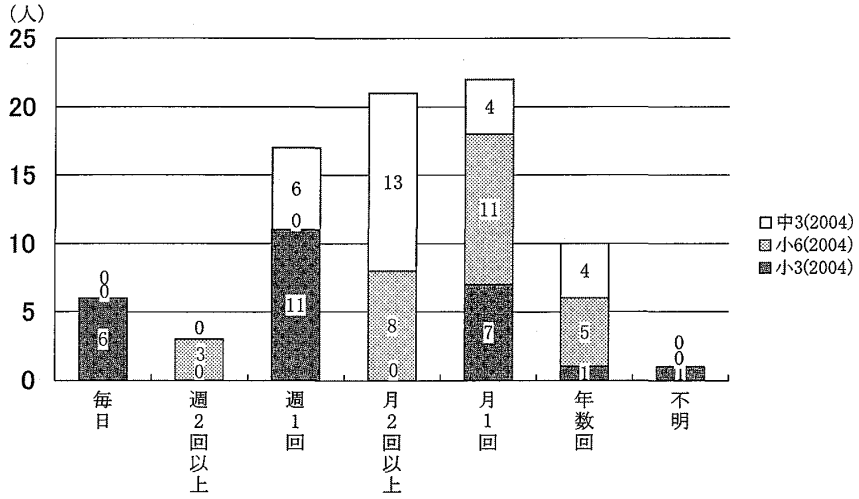


**図2**　コンケンに行く頻度

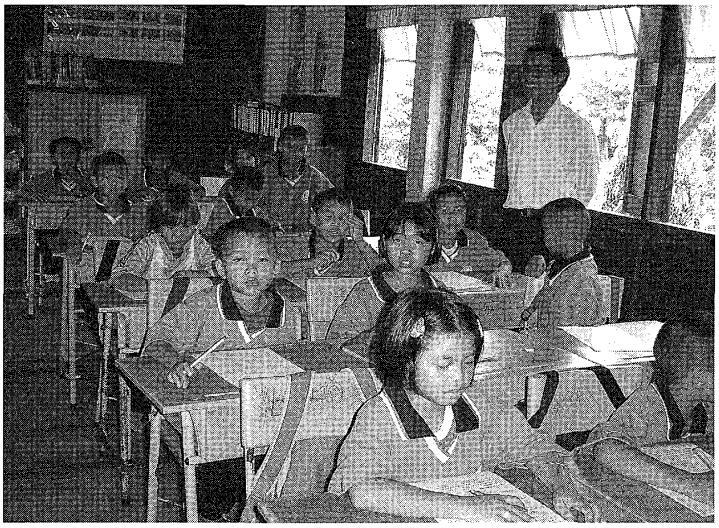

**写真2**　ドンデーン村小学校でのアンケート作成（2004年9月）

## 6. 新たな進学形態の生成と最近の進学傾向

### (1) ドンデーン・ドンノーイ村小中学校への進学拒否

1996年にドンデーン・ドンノーイ村中学校は設立されたが，近年は同中学校には進学せず，コンケン市内の中学校に進学する生徒が多くなってきている。また，保育園や幼稚園，小学校の段階からコンケン市内にある学校に通わせるケースが増加している。

表9は，2005年3月と2005年9月のドンデーン・ドンノーイ村小中学校の総生徒数を比較したものである。3月と9月の違いは，各学年とも1学年進級していることである。ここで注目されるのは，小学6年生11人が同中学校の中学1年生に進学していないことである。ドンデーン・ドンノーイ村小中学校の校長によると，現中学1年生が小学6年生の時は27人，現中学2年生が小学6年の時は30人の学級だったという。つまり，数人の生徒とその保護者は，小学校か

表9　ドンデーン・ドンノーイ村小中学校の生徒数の変化

| | 2005年3月 | | | 2005年9月 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 学年 | 男子 | 女子 | 計 | 男子 | 女子 | 計 |
| 幼稚園1年 | 16 | 14 | 30 | 13 | 8 | 21 |
| 幼稚園2年 | 7 | 12 | 19 | 12 | 12 | 24 |
| 小学1年 | 9 | 8 | 17 | 5 | 12 | 17 |
| 小学2年 | 18 | 16 | 34 | 9 | 8 | 17 |
| 小学3年 | 13 | 13 | 26 | 18 | 16 | 34 |
| 小学4年 | 15 | 16 | 31 | 12 | 14 | 26 |
| 小学5年 | 18 | 13 | 31 | 16 | 16 | 32 |
| 小学6年 | 13 | 14 | 27 | 18 | 12 | 30 |
| 中学1年 | 12 | 12 | 24 | 8 | 8 | 16 |
| 中学2年 | 20 | 14 | 34 | 13 | 12 | 25 |
| 中学3年 | 11 | 16 | 27 | 20 | 14 | 34 |
| 計 | 152 | 148 | 300 | 144 | 132 | 276 |
| 教員数 | 9 | 8 | 17 | 9 | 8 | 17 |

ら中学校に進学する段階で村の中学校への進学を選択しなかったのである。

なぜ，このような現象が急激に起こったのかは十分な検討が必要であるが，村人や村の学校の教員からの聞き取りでは，毎年数人は教育熱心な家庭の子どもがコンケン市内の学校に進学，または転校していくという。

子どもの高校進学についての聞き取り調査では，ほとんどの保護者が村の学校の学力水準の低さ・教員の指導力の低さ・教育施設の悪さについて語っている。なぜこうした現象が急激に起こったのか，その一例を紹介する。

A家は父がコンケン市まで働きに出ている。通勤は自家用車である。そのため，通勤のついでもあって，子どもをコンケン市内の中学校に進学させた。その際，A家はその親戚や友人も誘って，市内の学校に進学させることを持ちかけた。

ドンデーン村からミニバスでコンケンまで乗ると，子ども一人あたり月に450～600バーツかかる。Aは自分の車に乗せて運ぶので，一人につきミニバスの運賃より少し安く[13]，毎月運賃を取ることでガソリン代にしているという。通学させる親にとっては，ミニバスより安く，かつ学校まで送ってくれ，Aにとっても燃料費の負担を抑えることができる。このような「村人による斡旋型の進学」によって，ドンデーン村からコンケンの学校に集団で進学する現象が起こったと推察できる。(筆者注．聞きとり当時1バーツは約3円)

### g. 私立小学校への進学

ドンデーン村では，小学校の段階からコンケン市内の私立小学校に進学させている例もある。

P 家の場合，特殊な事情があるが，P の娘 S（10 歳）は日本人との混血である。日本で知り合った父親代わりの東北タイ出身の O は建設業の日雇い労働者で，日給は 170 バーツにすぎない。S は 1 年前まで日本で生活していたため，ドンデーン村に住み始めてもタイ語の読み書きはまったくできなかった。ドンデーン・ドンノーイ村小学校に半年通っていたが，読み書きは上達せず，コンケン市内にある私立の M 小学校に転校した。S は約 2 ヶ月で読み書きもできるようになり，両親は M 小学校に進学させて良かったという。進学に際しては，親戚の子どもも誘って車で通学している。入学に際して 6,000 バーツを支払ったうえで，年間 4,300 バーツの授業料，交通費として車の所有者に毎月 450 バーツ支払い，また給食費も年間 2,000 バーツかかる。単純計算すると，入学初年度に 17,700 バーツ支払わなければならない。

M 小学校は，コンケン市内にある私立小学校で中学校を併設している。教員は全員 4 年制大学卒業者で，小学校から英語の発音教育を取り入れているという。高校も設置することが決まっており，保育園から高校までの一貫教育を目指すという。

市内には他にも，カトリック系の学校とインターナショナル・スクールの 2 つの私立小学校があるが，この 2 校は M 小学校より授業料が高額なため，ドンデーン村からは行っている者はいない。現在，確認できている限りでは，S を含め，ドンデーン村から M 小学校には 6 人が通学している。

全数調査をおこなっていないので，その実数は不明確であるが，より早期の教育段階からドンデーン・ドンノーイ村小中学校への進学を避ける動きができていることは興味深い。

## 7. おわりに

本稿では，ドンデーン・ドンノーイ村小学生を対象に，約 20 年間隔で同一農村の同一学年の子どもに同一の質問をすることでその変化を考察した。子どもへのアンケート調査であり，必ずしも正確に実態を浮き彫りにすることはできない。しかし，農村部への加速度的な都市生活文化の流入は著しい。水野や野間が当時の調査で親の手伝いの好き嫌いを聞いた際に，「牛の放牧」や「水汲み」を挙げていたが，2004 年の調査では有効回答を取ることすら困難であった。ほぼ各家庭に水道は完備され，カオニャオ（糯米）でなく，炊飯器でカオチャオ（粳米）を炊いて食べることが多くなった。子どもは帰宅すればテレビで流れる日本やアメリカのアニメや映画をビデオで見たり，テレビゲームをして遊んだり，流行の歌をラジカセで聴いている。

ドンデーン村では，家庭に経済的なゆとりが多少でもあれば，より高い学歴を得ようとする状況になっている。それは，こうした農村部においても，高校への進学熱が上昇するなかで，ドンデーン・ドンノーイ村小中学校のような地元の学校ではなく，コンケン市内などの設備の充実した都市部の学校に進学させることで，より社会的評価の高い学校へ進学させる構造が形成されつつある。

こうした現象の一誘因として，村内に「機会拡充中学校」が設立されたことが大きな要因になっていると考えられる。中学校設立以前は，個々の生徒がコンケン市内もしくは周辺の中学校を

選択し通学していたが，中学校設立後，ドンデーン村周辺の生徒は通学の負担が減り，教育環境が整ってきたといえる。ところが皮肉にも，水野や野間が体験した地域と学校が一体となった光景は，子どもの世界からもドンデーン村とその周辺から確実に消えつつあるといえる。

[付記]

本稿の一部は日本地理教育学会（2005年7月，専修大学神田学舎）で，野間晴雄・岡田良平「東北タイ・ドンデーン村40年の経験－何が変わり，何を遺したか－」，岡田良平・野間晴雄「農村社会の変容過程における学校と進学意識の変化－東北タイ・ドンデーン村－」で発表した。その要旨は「新地理」第53巻第3号，pp. 59–60，を参照されたい。さらに，岡田良平・野間晴雄「東北タイ・ドンデーン村小学生の夢と20年後の現実－追跡調査によるライフヒストリー分析－」，2006年人文地理学会大会発表要旨集（近畿大学，2006年11月12日），でも言及した。

なお，本稿の作成には，日本学術振興会科学研究費（基盤研究（A）海外）舟橋和夫（14252001）平成14～17年度，野間晴雄（18251012）平成18年度，を使用した。岡田はこの研究費で2006年度関西大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部とした。調査に際しては，龍谷大学社会学部の舟橋和夫教授，龍谷大学大学院生の柴田恵介氏からから多くの教示とデータの提供をうけた。臨地調査の際に，協力していただいた多くのドンデーン村の方々に記して感謝申し上げる。

注

(1) 米村明夫編『世界の教育開発－教育発展の社会科学的研究－』明石書店，2003，天野正治・村田翼夫編著『多文化共生社会の教育』玉川大学出版部，2001など先行研究は多い。

(2) 水野浩一『タイ農村の社会組織』創文社，1981

(3) 口羽益生編『ドンデーン村の伝統構造とその変容』創文社，1990；福井捷朗『ドンデーン村－東北タイの農業生態－』創文社，1988

(4) 野津隆志「タイの教育スタイル－バンコク進学校での予備調査報告－」『人文論集』(神戸商科大学) 第35巻4号，2000，pp. 49–57，野津隆志『国民の形成－タイ東北小学校における国民文化形成のエスノグラフィー』明石書店，2005。野津の取り上げたヤソトン県は県民総生産も最下層部に入る県である。

(5) 舟橋和夫編『ドンデーン村再々訪－東北タイ天水田農村における40年間の動態研究－』，平成14年度～平成17年度科学研究費補助金研究成果報告書，龍谷大学，p. 83

(6) 口羽益生編『ドンデーン村の伝統構造とその変容』創文社，1990

(7) *Changwat Khon Kaen,* Royal Thai survey department, Bangkok 10200（1：50,000）より加筆修正

(8) 堀内孜「タイ国の教員養成・教員資格・教員採用－制度・実態と改革動向（1)」，『京都教育大学紀要』，Ser. A, No. 97, 2000, pp. 1–15；箕浦康子・野津隆志「タイ東北部における中等教育普及過程と機会拡大中学－中学進学率急上昇のメカニズムを中心に－」，『東南アジア研究』36, 1998, pp. 131–148

(9) 杉山和恵「1990年代タイの教育行政改革の動向－国家教育法（National Education Act）を中心に－」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学)』第47巻1号, 2000, pp. 45–55

(10) 水野浩一『タイ農村の社会組織』創文社，1981, pp. 243–245

(11) 野間晴雄「ドンデーン村小学生の夢と現実－東北タイ農村における児童の意識調査の集計結果から－」，『近江路』31, 1984, pp. 11–17

(12) 舟橋和夫編『ドンデーン村再々訪－東北タイ天水田農村における40年間の動態研究－』，平成14年度～平成17年度科学研究費補助金研究成果報告書，龍谷大学，p. 134

(13) 親戚の場合，運賃を取らないが，知人だと毎月300～400バーツ取っているとのことであった。

野間晴雄（関西大学教授）
岡田良平（関西大学大学院文学研究科・博士課程後期課程）

# The Change of Primary Students' Attitude in Last 40 Years in Rural Northeast Thailand : A Comparative Analysis of 20 years-interval Questionnaire Surveys

NOMA Haruo*, OKADA Ryohei**

Don Daeng village is located at the Chi River floodplain in Khon Kaen, rural area of Northeast Thailand. Three significant field surveys were conducted in last 40 years there. The first survey was conducted by MIZUNO Koichi, a Japanese sociologist, in 1964. The second integrated and interdisciplinary survey was conducted in 1981–83 by ISHII Yoneo, FUKUI Hayao, KUCHIBA Masuo, and younger research cooperators. The third survey has just completed by FUNAHASHI Kazuo and research cooperators in fiscal 2005. In last 40 years Don Daeng village has drastically changed form subsistence economy, then part-time farming-dominated village, and lastly to a suburban village that most villagers are commuting to work.

The aim of this study is to analyze the set of questionnaire to Don Daeng, Don Noi primary/secondary school students on their attitude in the following items by grade and sex in 2004 : 1) person or people they respect, 2) the intension of entering a higher-level school and to what level, 3) the intension of expected occupation and job, 4) favorite movies and characters. Furthermore, we also asked how often they go to Khon Kaen city. Total number of respondent is 53 primary grade-3 and -6 students, and 27 lower secondary students of grade-9. The main focus is how contemporary students feel about their village and future in the course of life with special reference to higher education.

As the tentative results, the following four points are indicated :

1. Agriculture was the expected job in 1983 survey for the majority of students, but present situation has driven into urban life style and weakened the intension of being farmers

2. The rate of going to higher education increased and students' behavior preference had been intended to move Bangkok directly, not Kohn Kaen or surrounding areas.

3. The background is the development of mass media in rural area and the introduction of urban-style in their student's life.

4. The majority of students' attitude had shifted into cash-income intended jobs or 'white color' interest.

*Professor of Kansai University

**Doctoral Course Student, Graduate School of Letters, Kansai University